

# 終戦の日のこと

山田 三代子

若宮三丁目

その日十一時三〇分になったら、一同食堂に集まるよう工場内のスピーカーで流されてきた。

皆何事と不安な気持ちで待っていると、社長が見え、これから十二時のラジオニュースで重大な放送があるから静かに聴くように、とのことであった。シーンとして待っていると、やがて正午の時報の後「これから天皇陛下の玉音放送があります」とアナウンサーの声である。生まれて初めて聴く天皇陛下のお声に、皆緊張し耳をすましていた。

そして私達平民とは違った静かなお声が流れてきた。それは終戦を知らせるお言葉であった。玉音放送を聴くや否や、あちこちからすすり泣きの声がしてきた。「日本は神の国、絶対に負けない。みんな一生懸命頑張ってきたのに悔しい」と、放送の後各職場に戻ってからが又大変であった。あちこちから泣く人となる人、又これからどうなるか心配の人等々で工場内は大騒ぎとなった。

当時私の働いていた所は今の国分寺で、中央工業株式会社南

部工場といって、九四年式、十四年式の拳銃と機関砲等を造っていた、とても大きな会社であった。正社員、学徒動員、挺身隊、軍人等一万人近くの人が働いていた。

毎日空襲警報になると、銀色に光ったB29の飛行機が何十機と編隊で来て、所きらわずに爆弾を落とし、機銃掃射をあびせて行った。誰もが本当に生きた心地がしなかった。毎朝家を出る時には、これでもう父母の顔も見納めかと思いつつ出勤したが、戦争が終ったのだと思うと、負けた悔しさはあったが、これからは空襲で逃げ廻らなくても良くなったという安堵感で、とても複雑な気持ちだった。

翌日、各職場に解散命令が出された。今まで共に苦勞してきた事、又楽しかった事等を語り合い、遂には涙の別れになってしまった。私達事務関係の者は、約一か月近く職場に残り、残務整理をした。その大きな工場も今は無く、高い塀だけが残され、違う高い建物が建っていた。ちなみに、戦中の私の職番カードは三〇〇番だった。今でもその時の給料袋を一枚、大切に

に保存している。  
あの時別れた同じ職場の人達は、今どこで何をされているの  
かと時々思うが、一度みんなにお会いしたいものと思う今日こ  
の頃である。

